



アジアを俯瞰する農耕文化論

国立民族学博物館(民博) 第2代館長佐々木高明さんは、梅棹忠夫初代館長の右腕として民博をつくったご先祖様である。文部省(当時)との予算折衝のさい、「梅棹さんが道をつけてあるから」と佐々木さんはよく口にした。しかし、官僚との丁々発止の議論で功を奏したのは、佐々木さんの用意周到な説得力だったようである。先を読み、その時々の手を打つ知的戦略家であった。

佐々木 高明さんを悼む

須藤 健一

内外に知らしめたのも佐々木さんの力によるところが大きい。開館の翌年(1978年)から10年間、特別研究「日本民族文化源流」を組織した。内外の著名な研究者を招いて議論を戦わせ、その成果をすぐに刊行する研究手法が、民博の研究レベルの評価につながったからである。

佐々木さんの研究は、ヒマラヤから日本にいたるアジアを視野に入れた壮大な農耕文化論である。大学院生時代から日本の山村で焼畑の調査を始め、南アジア、東南アジア、中国各地でも綿密なフィールドワークを行った。70年代には、稲作伝来以前の縄文時代の西日本に雑穀やイモ栽培を基軸にする照葉樹林焼畑農耕文化が存在したという仮説をたてた。当時、稲作の弥生起源説が主流、かつ縄文の農耕遺跡が未発見で、「異端の学説」と非難された。しかし、その数年後から縄文遺跡で穀類が相次いで発掘され、佐々木仮説は実証されたのである。

照葉樹林文化の「南の道」の文化とともに、北東アジアの文化とする「ナラ林文化」の存在も視野に、日本の基層文化はさまざまな文化を受容し、重なり合って形成されたことを指摘した。これが日本文化重層論である。佐々木さんは、民族学や考古学などの人文科学だけでなく、分子生物学や遺伝学など理系の研究者を巻き込んでアジアを俯瞰する農耕文化論を開拓した第一人者である。

97年の民博館長退任後、佐々木さんは「アイヌ文化振興・研究推進機構」の初代理事長に就任し、アイヌ文化の振興と発展にも尽力された。アイヌ文化の研究が日本文化の多様性と豊かさを認識するうえで極めて重要であることを提言している。それを受け、

去、83歳。佐々木高明さんは4日死



在りし日の佐々木高明さん
 〓2010年ごろ、向日市の自宅で

(国立民族学博物館館長) X X